

ました。中国軍は「昨日の敵は今日の朋友だ」、まして同じ東洋民族だ「黄色人種だ」と云って、前述のごとく、至極親切にそして丁寧に取り扱われました（意外だった）。收容所において、自分是他部隊と一緒にされ、分隊長と散り散りに分散せられました。

昭和二十一年二月十五日、上海を出港し、同月二十日に博多に上陸し、二、三日で復員手続き完了。一目散に自宅へ帰りました。私の復員は早い方でした。北の方も南の方も、それぞれ復員まで大変だったとのこと。私は幸運でした。

自宅には幼い弟が一人増えていました。親爺曰く、万一にでも「お前の身代わりにと作った」で親爺と手を取り合って「大笑い」。目出度し目出度しです。全員無事ということとは神仏の御加護の賜物と、あらためて感謝し、いつまでも平和でありますことを念じました。

死 生 観

京都府 芦 田 吉 雄

私は大正七（一九一八）年十二月八日、福知山の芦田家の次男として生まれ、兄と弟の三人の男兄弟と両親の五人家族でした。

昭和十四（一九三九）年ともなると戦時色はますます緊迫し、我が町からも、召集令状が来て出征する兵士の見送り等が見られるようになった。

手に手に小さな日の丸の旗を持った町の人達は「万歳、万歳」と叫びながら駅まで長い行列で送り、出征する者は「男子の本懐之にすぐるものなし」と勇躍戦地に赴いたものでした。我が家でも兄と弟も出征し、兄弟三人が出征兵士となりました。

昭和十四年度におけるわが国の中国大陸の対支政戦略の方針は、前年度に引き続き政治工作に

よって事變の早期解決を策することを主眼としていました。このため作戦面では積極的な動きはなく、九月には支那派遣軍總司令部が南京に創設され、中央の方針に基づいて、全支にわたる持久作戦の統一指導にあたることとなった。

その初代總司令官は西尾寿造大将、總參謀長には板垣征四郎中将で、西尾大将は開戦当初の野戦軍的性格から、建設軍としての軍紀の刷新と皇軍の面目を一新することを重視していた。また板垣中将は軍政の第一人者であり、和平工作を現地に進進しようとするものであった。

即ち政略面においては、昭和十三年末、重慶政府副總統格の汪兆銘氏が重慶から仏印ハノイに脱出し、五月には上海に入って和平工作も見え始めたが、俄かに蔣政權と和平を進めるには至らなかった。このような情勢の下で、突如として起こったのが、ソ満国境のノモンハン事件であった。

ソ連は中国に対する第一の支援者として日中事

變当初から物心両面にわたって抗日運動の後ろ盾となり、ソ連国境に兵力を集中して極東戦略を強化し、日本に対し無言の圧力を加えていた。その兵力は昭和十三年末には狙撃師団二十四、飛行機、戦車各二千、総兵力は約四十五万に達し、外蒙古には特別狙撃第五十七軍を新設し、昭和十四年度に入っても更に増強を続けていた。

これに対し我が関東軍は対ソ戦備は緒についたばかりで、質量とも雲泥の差があり、その兵力は八個師団と一騎兵旅団、八個の国境守備隊、飛行機六百という劣勢であった。

昭和十四年五月十一日、外蒙古軍の一部がノモンハン地方ハルハ河を渡河して満州国軍の国境守備隊と衝突したことが導火線となって、両国軍が血みどろの血戦を展開したのでした。そして戦闘は七月から八月に入っても止むことなく、旧式装備の日本軍と近代装備のソ連軍との差を嫌という程味わされ、既にこの時近代戦闘は空・陸共に機動力が重視される方向に変わっていたのである。

日本軍としては、日中事変という泥沼の消耗戦を続けている限り、戦備の対応はできなかった。しかし、支那派遣軍としては、黙って見てるわけにはいかなかった。第十三軍からも速射砲一個小隊の派遣を命じ、小池国利中尉が指揮をとり満州へ急派せしめた。しかし、すでに停戦となり、速射砲を現地に残し兵員だけが原隊に復帰した。

この時欧州では独軍のポーランド進攻が起き、ソ連としては極東で事を構えることができなくなったことからようやく停戦となったのでした。

かくして、日本軍としては再び全力を中国に傾注し、年内を前途として対重慶停戦、汪・蔣合流の和平工作を推進することとなった。また支那派遣軍としては、第一に警備態勢を確立して地区内治安の刷新を図ること、第二に援蔣ルートを根絶して、重慶軍戦力の滅殺を図ることを方針とした。

このような戦時情勢のとき、私も昭和十四年十

二月一日中支派遣要員として奈良第三十八連隊に入隊、直ちに浦賀より南京に上陸、現地原隊の第三十八連隊大熊部隊第十一中隊中村隊に配属された。現地での初年兵教育を受け、私は幹部候補生として教育隊に入隊、幹部としての厳しい教育を受ける。現地教育即戦闘要員の訓練である。

戦況は悪化しているが、古年兵の守備に守られて昭和十四年も無事に暮れ、同十五年の元旦を第一線で迎える。正月早々から中支にも雪が降り、大地一面銀世界となる。現地人の話によれば、六十年來の大雪だとか。初年兵教育も日増しに厳しさを増し雪中行軍、銃剣術、匍匐前進、突撃と演習、そして内務教育にと、戦いつつ学ぶという状況だった。情報によれば、砲兵隊の初年兵は作戦で雪の降る中を弾薬運搬をしていると聞いた。

教育も二月、三月と過ぎ、クリークの柳の芽がほころび、山には松の木や山つつじが多く、部落の周りには竹藪があるなど、銃声などしなければ長閑かで内地の風景によく似ている。夢中で三月

も終わり、一期検閲を杭州の練兵場で受ける。

同十五年四月二十二日、春季皖南作戦参加のため杭州駅を列車輸送で出発、嘉興、蘇州を経て南京に到着、南京城内の軍官学校中山大学に宿営し、同地区の警備に従事した。また、南京城攻略戦の雨花台城壁、城外の紫金山、中国では珍しい温泉地「湯水鎮」などを見学する。五月初旬の紫金山のアカシヤの花が咲き乱れる様子は匂い芳しく、まるで別世界のような気分であった。陥落以来間もない南京城内の治安は良く、天秤棒を担いだ良民姿も多く見られるようになって来ていた。

引き続き五月六日より襄東作戦参加のため、南京埠頭より乗船、揚子江（長江）を上流へと漢口に向かう。出発してからの位過ぎたか、一人の船員が、進行左前方の山腹の白壁の家の方を指差して「あれが廬山です」と教えてくれた。

船は茶褐色の濁流が渦巻き流れる揚子江を上流へとスクリューを全回転させ漢口の埠頭へと上陸

をする。

この地は武漢三鎮と言われ、北に信陽を経て北支に通ずる京広線、南は武昌より長沙を経て南支に通じる京広線が走る。また漢水と揚子江の合流する戦略上重要な地点で、すでに日本軍が占領し、松田兵站や野戦病院の川北病院等が有り、前線基地として行き交う部隊も多く活気にみちていた。

應城そして安陸と、漢水を左に武勝関方面に進むと思えば襄陽方面へと、大行山脈が今期作戦の主戦場なのか無我夢中で行動する。前進した日本軍の補給路遮断の目的で、敵將湯泊軍の精銳が大部隊で侵入し、彼我入り乱れての戦鬪である。湖北盆地を大行山脈と漢水の右岸を行ったり来たりする。北方より吹く風に混じり飛んで来る黄土が銃に積りその手入れが大変な有様だ。飲み水も少なく強行軍の毎日が続く。部隊は更に前進して無為、無安、更に東関、高林據と進軍して行った。

昭和十六年の春を迎え、師団は「占領地住民に

は和をもって接し、敵対する者に対しては断固たる措置を執るべし」と布令を出していた。しかし、執拗な敵は追っても追っても腐肉にたかる蠅のようにちよつと手を休めると、またぞろ跳梁を始めるということで、業を煮やした軍司令部は「この際断固たる処置を執る」という方針で、昭和十六年三月、江西省巢湖付近の作戦を企図したのである。

昭和十六年三月十八日、攻撃命令下る。巢県付近には樹木もなく、前進するのに必要な遮蔽物が一つもない岩山と赤土肌の裸山である。敵はその高地に陣地を構築し、県城随一の要害であった。我々分隊はその陣地に突入を命ぜられ、足をすり腹をすりながら前進をしていた。小隊主力は後方の台地上にあって、軽機関銃と擲弾筒をもって支援射撃を行って、敵陣地には榴弾が炸裂し機銃弾が飛んでいるのに、敵はどこから射って来るのか「ダン！ダン！」という着弾音と共に赤い土煙りを上げ岩を砕いて飛び散らしていた。

前進は思うようにいかず他から見たら尺取り虫のようだと思ったであろう。

しかし我々には生も死もなかった。勇猛心にかられたり滅死奉公というような崇高な精神に徹した訳でもない。ただ機械のように、人間性のないロボットのよう動いていた。

間もなく部隊本部の方から連隊歩兵砲の射撃が始められ、敵陣地付近は榴弾の炸裂で岩を飛ばし土をはね黒い爆煙で覆われた。自分達は元気づけられて這い登り、ようやく敵陣地の崖下に辿り着き、身を伏せて突撃準備をして時を待った。

砲の支援射撃がハタと止んだので、時を移さず「突撃！」の号令と共に敵陣地に飛びこんで行った。その時である。敵弾が左胸部貫通銃創の負傷をした。出血多量の為だんだんと眼の前が真っ暗くなり意識を無くした状態となりどうする事もできない。しかも敵前である。朦朧とした目の前で分隊長の宮田伍長が、剣を持ち壕内から立ち上

がって来た二人の敵兵の一人は刺殺し、襲いかかって来た他の一人は腰だめで射殺してしまった。全く眼の前での出来事だった。

廟の中には多数の敵がいるらしい音声が開き、四、五人の分隊員に手榴弾を準備させ、廟の中庭へ投げさせた。手榴弾は廟の中で続けざまに炸裂し、爆音と共に敵の悲鳴が開き出した。多数の敵は入口から我れ先に逃げ出し、これに軽機関銃の銃弾を浴びせると、ころげるように落ちて行った。

やがて分隊の戦友達が竹編みの担架を見つけて来た。衛生兵が止血の処置をしてくれた。担架に約一昼夜乗せられて、他の戦傷者と共に錦上寺という所に収容された。ここはまだ治安が悪い。午後四時頃だったと思う。敵の迫撃砲の集中砲火を浴び、迫撃砲弾は屋根を貫き、瓦の破片が右額のまぶたに当たり目が開けられない状態となる。側にいた衛生兵の山田が「生きている幾人かがやられたらしい」と言うが、自分は目が開けられない

ので誰がやられたかわからない。

この時から自分の死闘が始まったのです。化膿した異臭の体、かろうじて動く右手で水水と言った呼ぶが誰もくれない。極度に渴きを覚え、腕の汗をむさぼり吸った。敵が近く突撃して来る呼び声で負傷者の自分達は荒々しく担架に乗せられて寺を脱出し、二〇〇メートルも走った頃、今まで収容されていた寺が黒煙を上げて炎上している。モタモタしていたら命がなかったのだった。涙が出てぞーっと寒くなり、ウウウと唸ったのを覚えてる。

四月十一日、ようやく撫湖の野戦病院に収容された。背部切開手術のため手術台に横たわる。その日戦友の中野君が腕を負傷した姿で顔を見せてくれた。初めての戦闘で大熊部隊中村中隊の幹部候補生の自分に気付き手を取り合って泣きました。

二度の切開手術を受け再起不能の体となり、昭

和十六年十月五日、くやし涙の内地帰還を命ぜられ、上海より病院船「吉野丸」で送還されたが、左腕は上がらぬまま、やっと支えられて歩行ができる程度、呼吸するのも片肺で大声が出ず、せき、くしゃみが出てとても苦しかった。広島品の港に着き、陸軍病院に落ち着き、受傷後の部隊の行動等を聴きました。

我が大熊部隊の第三大隊は、敵地の奥深く入り過ぎ敵大部隊に包囲されて一斉射撃を受け、殆ど全滅、一個小隊程が辛うじて残ったとのこと、ようやく第一大隊の援軍が到着、敵を殲滅したと。

その後部隊は第五十三師団「安」兵団に編入されビルマ方面さらにインパール作戦に参加することとなった。

部隊はタイのチェンマイ市に集結し、インパール作戦の参加のため北上し、兵士は勇躍トングー道路の構築作業に従事する。しかし今日までの幾

多の戦闘で、我が中隊は昭和十八年中の戦死者十八人、戦病死七十二人、負傷者十八人、不明者六人となっていた。

昭和十八年十二月、緬甸を出発、翌十九年九月の「磐作戦」が展開されたが、司令部からの食糧の補給はなく武器弾薬も欠乏して来た。飲み水に事欠き、河の水を飲んでほとんどがアメーバー赤痢にかかり、或いはマラリア、 Dengue 熱等でバタバタと倒れて行きました。衣服は汚れて破れ皇軍の兵士とは見られない姿になってしまったのです。

そして昭和二十年一月のイラワジ河畔の戦闘では惨々たる敗北となり、また四月の「克作戦」には味方は散り散りになり、同年兵の下士官が小隊長として指揮を執る状態となり、既に小隊では六人の戦死者を出したことを聞かされました。

部隊は昭和二十年五月、モールメン南方地区に集結、次の作戦準備をしました。サルウィン河の

渡河作戦には、地元の貨物船らしく屋根をよしず張りにして河の中頃まで行った時、敵の集中砲火を浴びて全員河に飛び込み、幸いに全員仮死状態で引き揚げられ助かったのです。

サンジャックを基点にカーメン方面とセンマイ方面の包囲作戦では、山頂より眼下にインパールの街の灯を見ながら精根ここに尽きたように坐りこみ、天は我らを見放したかと号泣した。

敵の近代科学兵器は支那作戦当時とは全く比較できないほど優劣差があり連日連夜の空爆に、将兵の殆どは自失茫然として退却の命止むなしと涙をのんだ……ということでした。

カーメンの北方三二四高地より谷間を見ると、平地には敵の重戦車が四、五台、戦死した日本兵の死体を寄せ集めている。英軍の戦車だ、間もなく茶毘に付す鉛色の黒煙が上がった。火炎放射機で集めた死体を焼いている。この光景を見た時、おのずと手を合わせ靈魂よ安らかなれと涙で祈ったのです。

最早命運尽きて死んだ方が幸せか、今まだ細々と生きている自分が幸せなのか、判らないまま自失茫然として後退の途を歩んだ。

昭和二十年八月、泰國のパンボンまで後退、次期作戦命令を待っていた時日本は遂に敗戦となり、同地よりナコンナヨークの收容所に向かう。

想えば昭和十九年六月以来、戦死者一二三〇人、戦病死者一一五一人、戦傷不明者二九一人、行方不明者多数の犠牲者を出したのです。

昭和二十年三月二十一日、タベイキンの戦闘で無二の親友中野君の戦死の報せに大きな衝撃を受けましたが、思い直し奈良県磯郡の生家に行き家族と共に泣き明かしました。小隊長として敵陣に突入、左大腿部に銃弾を受け出血多量の中自ら軍刀を抜き割腹したと。「天晴れ」と褒めました。が、何故……と惜しまれました。以来、今日まで毎年墓参を続けておりますが悲しいことです。

我々の部隊は初めは中国大陸に、次はビルマ、

インパールの南方の地に、また一個連隊は南海の島フィリピンで玉砕をする。歩兵第二十四連隊軍旗もレイテ島で奉焼されたのでした。

米軍再上陸のレイテ島の戦闘は、従来 of 戦闘展開を遙かに超えた壮絶な空爆と重砲射撃、重戦車の陣地蹂躪、火炎放射器による焼殺戦法など想像に絶する阿修羅の様相だった。命令とは言え同じ部隊の中で編成替えてこのような地に行った幾多の戦友の事を思えば唯々冥福をお祈り申し上げるほかありません。

インパール作戦でタベイキンの丘で手榴弾で自決した戦友……倒れた戦友が「水！ 水！」の一言を発し、わが腕の汗をなめて死んで行った。授ける力もなく気力も薄れて見返した友。このような姿は究極、人間の生きざまは己の体なのに、今もう生きることさえ判らない放心の姿でした。哀れです。

この身は臥して護国の鬼たらんとしたが奇しく

も生き永らえ、微力ながらも日本再建のため役立つ礎石とならなければ死んだ戦友の霊には申し訳ないと、余生を世のため人のために励んできました。

在天の英霊よ御照覧あれ。

湘桂作戦従軍記

福島県 清水 清

私の家は貧乏な農家で田七反、畑五反と養蚕で生計を立てていました。

六歳の時、父が急性肺炎で死亡しました。母は二カ月後に幼い弟一人を連れて実家に帰り間もなく病死しました。

私と妹は祖母と叔母に育てられ、私は昭和十六(一九四一)年五月兵隊検査で第一乙種合格となりました。検査時には農家と養蚕をやっていました。